

小学校臨海学校における緊急時訓練プログラムに関する実践的研究

矢野 正
帝塚山学院小学校

A Practical Approach to Emergency Drills for Elementary School Summer Camps.

Tadashi YANO
Tezukayama-Gakuin Elementary School

The purpose of this study was to find the strong and weak points of emergency drill programs for summer seaside camps.

In order to conduct safe classes, Z Elementary School published a “Seaside Handbook” before summer vacation. This manual explained the plan and actions to be taken in case of an emergency.

369 elementary school students in the 4th, 5th and 6th grades and 39 teachers participated in this program. Our study included reading the records of the students and teachers which reflected what was learned, and included the guidance given by lifeguards.

Since both the students and teachers had an awareness of the safety measures, there were very few students who were injured or became sick. To avoid any feelings of insecurity for the students, drills and actions to be taken during an emergency were explained thoroughly.

There drills are part of a safety education program that gives the students skills which can be used in cases of emergency. This training has improved the safety at the seaside camps.

Key words/ Safety, Summer seaside camp, Emergency drills, Elementary school students

I 研究の目的

学校の安全神話が崩壊し、学校安全教育が叫ばれるようになって久しい。安全教育についての研究が進められているが、消防でいうなればどちらかといえば、消火と防火でいう消火の面に力が入れられてきた。近年は、防火といった観点からの開発も進められ、保健学習においても傷害の発生要因や危険予測といった学習が行われている。

実践性を考究する安全教育においては、消火よりむしろ防火の面からのアプローチが重要である。しかしながら特別活動などの校外というフィールドに絞ったとき、先行研究においては海浜における安全対策システムに関する研究(中見, 1991, 中見, 1992, 池上他, 1999)は報告され

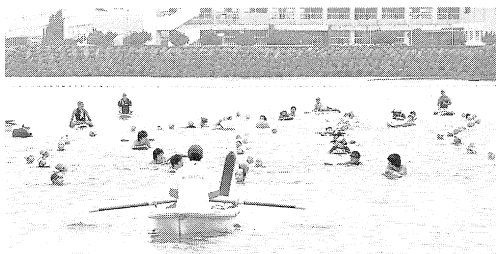
てはいるが、多くの実践に結びついているとはいえない。また、危機管理マニュアルの作成の有無からみた大田(1998)の調査研究によれば、水泳事故のマニュアル作成率は2.3%であり、学校事故(授業中や休み時間の重大事故など)についてのマニュアル作成率83%と比べても明らかに遅れている。目に見える安全機器や機材の整備等のハード面の整備に比べて、教員等のソフト面の充実が遅れているといえる。

さて、小学校における宿泊体験学習の実施は、学習指導要領上において「第4章特別活動」の「遠足(旅行)・集団宿泊の行事」として位置づけられている。しかしながら、このような学習指導要領上の根拠があるにもかかわらず、実際には期間の短縮化や実施の取り止めなども行われている。

現状では、小学校における臨海学校は、1泊2日や2泊3日ということが多い。さらに、少ない期間中での実践において救急体制の整備と対策というものには疎かにされてきているという実状や背景があるのではないだろうか。また、水泳実習というと大学生を中心とした研究が多く、小学校を対象とした研究は大変稀であり、さらに安全対策についての研究は皆無に等しい。

そこで今回は、小学校を対象に緊急時訓練プログラムの実践を行うことで緊急時訓練プログラムの具体的な長所と短所を明らかにすることを目的とした。また、緊急時訓練を臨海学校の初日に行うということで、実習期間中の指導者と児童の安全に対する意識向上につながるのではないかとという緊急時訓練の有効性についての検証を試みた。本研究は、臨海学校の安全管理においてハード面とソフト面を結ぶ新たな実践である。

なお、「臨海学校」のことをZ小学校では、「臨海学舎」と呼び「臨海」と省略することもある。同じく「水泳練習」を「水練」と省略した。



写真－1. Z小学校臨海学舎の遠泳練習

II 事故防止と緊急時の体制

研究の対象としたZ小学校においては、毎年7月の中旬に5泊6日という比較的長期にわたり水泳実習が行われ、高学年児童(4・5・6年生)約380名が参加する。Z小学校では、学校の水泳指導管理マニュアルに加え、臨海学舎における指導マニュアル(以下、臨海ハンドブック)を作成し、他の学校や指導団体から高い評価を得ている。その上で、安全な水泳指導と教員の資質向上を目的に、様々なプログラム(表1)が指導者のために実施され、

さらに引き続き臨海学舎においての海とプールでの事故を想定し、学校内において緊急時訓練のシミュレーションを実施し、それを基に臨海学校において「緊急時訓練」を実施している。

表1 臨海学舎指導者対象の水泳指導の安全講習の事前プログラム

時期	名 称	内 容
4月下旬	日本赤十字 水上安全法	日赤指導員によるプール開き前の水上安全講習会(CPRを含む)及びレスキューチューブ・レスキューボードの扱い方の講習会
6月中旬	第1回 安全講習会	ライフセーバー有資格者によるハンドサイン・脈の計り方・心肺蘇生法・運搬法などの講習会
6月下旬	臨海ハンドブック 事前読み合わせ	職員会議時に、指導者全員が臨海ハンドブックの読み合わせ
7月上旬	第2回 安全講習会	ライフセーバー有資格者による第1回講習会の復習及びレスキューチューブを使ってのドラッグ救助法などの講習会
7月中旬	緊急時訓練 シミュレーション	運動場を臨海に見たてて、校内における緊急時訓練のシミュレーションの実施

まず、臨海学舎水練部を中心に臨海ハンドブックを作成し、事前に全員で読み合わせを行った。臨海ハンドブックは毎年、前年の反省などを活かして改訂版を作成し、充実した内容になっている。なお、臨海ハンドブックは付録に後掲した。臨海ハンドブックは付録の他にも、実地踏査・下見報告、臨海の各機関、緊急時訓練の実施要綱、臨海前後の潮汐表、災害発生状況記録表、1人法と2人法による心肺蘇生法のフローチャート、ハンドシグナルサイン(手信号)、海で遊ぶ際のルールから構成される。

III 方法

研究は、Z小学校の臨海学舎の緊急時訓練を対象とした。研究時期は、2004年7月13日～18日の臨海学舎期間であり、研究対象とした緊急時訓練は、臨海学舎の初日に実施した。

1. 緊急時訓練

a. 緊急時訓練の手順

緊急時訓練の手順は、浜に集合し、点呼を終えてから①ビーチクリーンアップ②準備体操③第1回水練(10分程度)④休憩(15分)⑤第2回水練の順で水泳練習を行い、訓練は2回目の練習開始約10分後に実施した。訓練場所は、水練場所で、訓練の対象はすべての練習班(18班369名)及び指導者38名である(表2)。

表2 2004年度水泳練習班編成表

班泳力	班数	指導者数	男子	女子	合計
特別班 (1 km)	2	4	15	35	50
中級班 (500m)	2	4	8	24	32
中級班 (300m)	3	6	16	37	53
中級班 (100m)	2	4	10	27	37
中級班 (50m)	2	4	10	26	36
中級班 (25m)	2	4	16	32	48
初級班 (25m未満)	5	12	32	81	113
計	18	38	107	262	369

表3 児童への事前説明内容

説明内容と注意事項
<ol style="list-style-type: none"> 1. 訓練は初日に行われる。 2. 浜で事故があった場合、太鼓が連打される、笛が吹き鳴らされる、テント本部の前で旗が振られるなど合図がある。 3. 水練担当の先生の指示にしたがって行動する。そして、声を出さず速やかに旗の下に集合し、パディを確認する。パディがない場合は絶対に座らない。先生の指示があるまではその場を離れない。 4. 初級～50m班の児童は、先生よりも早く一番近い距離で浜にあがること、100m班以上の児童は、先生の誘導に従い隊列を崩さぬように浜にあがる。

b. 児童への事前説明および関係機関への周知

なお、臨海学舎前には参加児童に対して、水練長から緊急時訓練についての説明を行い、児童の不安を和らげるよう努めた。

児童への事前説明内容は、表3の通りである。なお、臨海緊急時訓練を実施するにあたっては、地元の消防署に臨海において初日に緊急時訓練を実施することを事前に書面で通知した。また、訓練当日は訓練実施中の看板を設置し、売店や海水浴客に説明を行った。

c. 緊急時訓練の事故想定

事故の想定は、「練習中、担当班の指導者 a が波打ち際でうつ伏せに倒れている1名を発見。引き上げ後、意識なし。呼吸なし。循環のサインなし。脊髄の損傷なし。」であった(表5)。今回の緊急時訓練の設定は、「児童が練習中に疲れて意識

がもうろうとし倒れてしまった」ではなく「初級班の指導者が疲れて倒れてしまった。」といったものであった。溺者の設定において、児童ではなく指導者としたのは、実際に起こりうる可能性が高いからである。なお、救助及び関連活動は少なくとも初級班～50m班のスタッフから11名を必要とする(駆けつけた順に、b c d e f g h i j kとする)。

d. 指導者の確認事項

また、2003年度の反省より、臨海学舎で児童を指導し、緊急時訓練を実施する者として確認すべきチェック項目を以下(表4)のように作成し、訓練に臨んだ。

表4 臨海学舎水泳練習

チェック項目
<input type="checkbox"/> 緊急時以外笛を吹かない。 <input type="checkbox"/> ビーチクリーンアップを心がける。 <input type="checkbox"/> 練習後も状況を見て各班で体操やストレッチを行う。 <input type="checkbox"/> 日焼け止めの徹底と水分補給を的確に行う。 <input type="checkbox"/> 流れがあることを、子どもたちにも伝え、隊列ごとに流されてもいいコース取りをする。 <input type="checkbox"/> 児童に事前にコース取りを説明し、不安を取り除く。 <input type="checkbox"/> 遠泳中に児童たちの顔色チェックと同時に先生の安全確保として、先生の顔色や体調のチェックもお互いに行う(先生のパディチェック)。 <input type="checkbox"/> 児童全員が海から上がるまで機材を持つ。 <input type="checkbox"/> レスキューチューブを立てて使う。 <input type="checkbox"/> 浜に上がった教員も、海で他の班が泳いでいるときは意識して見ておく。 <input type="checkbox"/> すべてのテストの時、必ず全体監視する人をつける。 <input type="checkbox"/> テスト中、遅れていく子どもを引き渡すときには必ず名前の確認を行う。 <input type="checkbox"/> 子どもの海に対する恐怖心を取り除く話や言葉掛けをするよう心掛ける。 <input type="checkbox"/> クラゲに刺されたら、冷やすことが一番である。「クラゲに刺されてもこすらないで。安心していいよ。」といった、パニックにならない言葉掛けをする。 <input type="checkbox"/> 隊列で泳がせるときは、パディ同士で間隔を常に意識させる。 <input type="checkbox"/> 練習やテスト前に担当の指導者同士でミーティングを行う。

表5 緊急時訓練の流れ

指導者	行 動	注意事項
a	笛と声, シグナルサイン, ハンドマイクサイレン, 太鼓連打で, 周りの教員・同窓生等(以下スタッフと称す)に事故発生を知らせる.	周りの各班の指導者はスタッフを1名残し, できるだけ速やかにaのもとに集結する.
b	aとともに, 溺者を波打ち際から安全な浜まで引き上げ, さらに溺者を観察し引き続き救助活動を行う.	
cとd	活動の援助を行う交代要員. 溺者の観察と駆けつけた人員にe以降jとkまでの指示を出す. 同時に溺者の確認を行う.	溺者の把握・確認を確実に行う. また, 事故発生時刻も確認しておく.
e	公衆電話で119に連絡する.	訓練時では, 宿舎に連絡する.
f	テント本部に連絡. テント内スタッフの1人は太鼓の乱打. 2人目はフラッグサイン, 3人目はトランシーバーで事故発生を告げる.	伝達を確実にし, テント本部で溺者の把握及び確認を行う. 本部には, 養護教諭, 宿舎従業員2名待機.
gとh	テントから, バックボード, 人工蘇生器, 毛布等の救命用具を溺者の所に運ぶ.	
i	レスキューファイルを持って溺者のもとに駆けつける. cやdなどから状況を聞き, ファイルに書き込む.	救急隊員が到着次第, 書き込んだ状況を用いて説明する.
jとk	駐車場で救急車の到着を待ち, 溺者のいる場所まで誘導する.	搬送先: 国保病院(宿舎より150m, 海浜より250m)
浜辺のスタッフ	担当児童を班のもとに集め点呼を行い, 安全を確認し入水ボードに人数を書き込みに行く.	すぐに児童のもとに戻り, 児童にわかっている範囲(あいまいな説明は混乱させるだけ)での状況説明を行い, 安心感を与えるよう配慮する.
沖のスタッフ	各班1名のスタッフを残し状況判断し, 救助及び関連活動を援助する. 浜に上がったスタッフは, 旗のもとに集まり, バディ確認することを確実に児童に伝えた後, すぐに駆けつける.	残った1名は, 班の最後に浜を上がり, 担当児童をすぐに旗のもとに集め点呼を行いボードに人数を書き込みに行く. ただし上陸場所が旗から離れている場合, 点呼はその場でを行い, すぐに児童の場所に戻り状況説明を行い, 安心感を与えるよう配慮する.

2. 研究方法

a. 緊急時訓練後の反省会記録

緊急時訓練の反省会を筆者が記録し考察した. 緊急時訓練の反省会においては, 第一発見者, 溺者役の指導者, その後に駆けつけた指導者, 本部及び伝馬船にいた指導者からの客観的な指摘及び反省内容が出され, 示された内容から検討を行った. また, 児童管理を行った指導者からは児童の様子や感想が報告され, 教員の反省会の内容からも緊急時訓練の有効性の検討を行った.

b. ライフセーバーからの指摘内容の記録

臨海学舎の運営及び緊急時訓練のオブザーバー

としてライフセーバーが5人常駐している. 緊急時訓練時, ライフセーバーには, 全体的な訓練の様子, 詳細な時間把握及び発見後の情報伝達の有無, 救助者同士の連携, 発見者及び溺者に対する関わり方などの項目について指摘するように依頼した. また, 緊急時訓練の有効性を検討するため, 個々の児童や練習班の様子や動きについても意見を求めた.

c. 児童の感想文の分析

さらに, 緊急時訓練の有効性を検討するために, 児童がその日に書いた日記の記述ならびに, 臨海学舎後に書いた臨海学舎の思い出と題した児童の

作文を収集し分析に用いた。

IV 結果と考察

1. 緊急時訓練後の反省会記録

a. 第一発見者(中級100m班の指導者)の反省内容

児童を陸上に上げているときに発見した。泳力的に弱い児童が多い中のこともあり、非常に動揺した。児童のその後の実態もよく覚えていない。発見して笛を吹いたが、一人では混乱してしまい落ち着いて対応できなかった。途中から対応が変わって欲しかった。次々に声をかけてくれたことで、何とか対応できた。

b. 溺者役の指導者の反省内容

倒れていて、意識があった中で、精神的に不安になることがあった。実際なら、発見されるまでに水を大分飲んでいただろう。

c. その後に駆けつけた指導者の反省内容

緊急時の太鼓の音が聞き取りにくかった。ハンドマイクのサイレンは鳴らしていたのか。実際には太鼓の撥(ばち)がなかったの、別のものでたたいた。また、サイレンは鳴らしたが、短かったかもしれない。

溺者を横に寝かせる方向は、浜と平行にしたほうが良かった。また、救急車の進路を確保しに行ったが、事故現場の状況が分からなかった。一人だったので、知る由もなかった。入ってきた医師には、応急処置をしていることしか伝えられない。

事故現場にトランシーバーを持っていたが、本部にどう伝えればいいのか分からなかった。次からは、本部から尋ねられたことに答えることにする。

事故現場にレスキューファイルを持っていたが、周りの指示が多かったの、混乱した。客観的には、溺者にあまり声かけられていない気がした。総括をし、指示を出すのは難しい。

事故発生時、1km班が陸に上がっていない状況だったので、手のあいている教員で事故現場を支

援していくしかない。陸に向かっていて最中でも、トランシーバーを持っていたことで、事故現場の状況がよく分かった。しかしながら、トランシーバーを持たない1km班の後ろについていた教員は、何があったか分からなかった。また500m班でも分からない状況であった。伝馬船からはある程度は知らされたが、はっきりした情報を知らせて欲しい。

500m班の水練中は、ホイッスルもサイレンも聞こえなかった。風上にいる教員がトランシーバーを持つべきである。さらに、500m班と300m班が交錯しそうになったので、進行方向を変えて対応したが、対応については、事前に約束事を決めておくべきであった。

d. 本部にいた指導者からの反省内容

本部のテントからは事故発生、溺者の発見時の状況がよく分からなかった。トランシーバーからも状況が伝わらなかった。事故現場のCPRも不安げで、助けを待っているように思いのほか時間がかかった。本部には人が余っていたが指示が出ないので、適切な動きができていなかったのではない。誰がどの役割に当たっても、その時に合った対応ができるようにしたい。

e. 伝馬船にいた指導者からの反省内容

300m班で陸に上がる進路をとるときは、斜めに上がるのではなく、まっすぐ浜に向かっていくのが良かった。途中で隊列が切れるところには、教員がつくことで対応することができる。

300m班は、ハンドブックに記された通りの上陸をしていたが、変更があるのならば指示や報告がほしい。緊急時の上陸は、臨機応変に一番早く安全が確保できる方法を取るのがよいと改めて感じた。

2. ライフセーバーからの指摘内容の記録

a. 全体的な訓練の様子

発見者の笛の音は、去年より大きくてよかった。ただし、練習時にまだホイッスルを多用しすぎている。スタート時も水面をたたくなど工夫して、

ホイッスルを使うときは、はっきりと緊急事態が発生した場合のみであるといった全体の意識を持つことが望ましい。

児童を陸に上げるときは、必ず指導者の一人が児童の後ろから児童全員の上陸を見届けるように徹底してほしい。赤いレスキューチューブを立てることで、児童に目標を意識させているのは良かった。また、500m班の上陸の対応(臨機応変に進行方向を変える)は良かった。

児童に安心感を与える声掛けができていた。

b. 詳細な時間把握と発見後の情報伝達

非常に溺者の確保からCPR、救急車への引渡し搬送までの時間が早く理想的な時間の流れであった。しかしながら、伝達手段の1つであるハンドマイクのサイレンが短かった。旗を大きく振るなど、あらゆる手段を用いて、周囲に状況を知らせる工夫をする必要がある。

c. 救助者同士の連携

現場に運んだレスキューファイルが、有効に利用できていなかったように思う。

またトランシーバーは、本部と現場をつなぐことを優先すべきである。周囲は、それを聞き取り、全てを児童に伝えるのではなく、指導者で判断して、伝えていく。また情報が伝われば、最速で安全を確保できる動きが起こしやすいので、トランシーバーはできるだけ持つほうがよい。さらにトランシーバーは、風上で使うようにしたい。

CPRを行っている動作で、溺者の状態を知ることができる。本部に情報を知らせる時には、CPRをそのまま伝えるだけでも、随時状況は伝えることができる。

d. 溺者及び発見者に対する関わり方

第一発見者に対する周囲のサポートはできていた。溺者役が指導者であったため、ドラッグ(溺者の浜からの運搬)に手間取っていたが、運搬は一回で済ませた。

また溺者の蘇生を最優先することを常に意識する。周りの対応に気がまわりすぎてCPRがおろそかになっていたように思われた。

さらに溺者の運搬用のバックボードは、広いほうに頭を寄せ、脚を先頭にして進んでいく。階段では、階段と水平に運び、足が下になるように運ぶようにする。

e. 今後の課題

これまでの練習の成果は確実に出ている。プールでの練習でも、常に監視を心がけて欲しい。

緊急時訓練を行うことで、事故防止に必要なことを知り、不備があったら修正をすることができる。

また、自分のその時点での能力を知り、今後の課題として、取り組むことができる。実践を積んで慣れることを通して、水練以外の事故にも対応できるようになるので、今後も緊急時訓練を有効に活用してほしい。

3. 総合的考察

a. 緊急時訓練の結果と考察

本研究の第一の目的は、緊急時訓練プログラムの長所と短所を明らかにすることである。本研究の結果、長所としては児童の上陸の仕方、児童への言葉掛け、溺者発見から引渡し・搬送までの迅速な対応、短所としては主に情報伝達の仕方がそれぞれ明らかとなった。

現場にトランシーバーを持っていくのが遅く、本部が発見時の状況がつかめなかった。トランシーバーでの伝達は、本部と現場のみの通信を最優先すべきである。また、子どもが知らなくてもいいこともあるので、トランシーバーで聞き取ったことをすべて子どもに伝えるのではなく、教員が判断する。また、ハンドマイクのサイレンが短く緊急時の音や情報を聞き取ることができない班があった。

また今回は、溺者が指導者ということもあり、実際に誰がおぼれたのかという「溺者の確認」が不十分であった。仮に児童が溺者である場合、指導者や担任は、溺者が誰であるのかを確認し、それをもとに病院や家庭への連絡などを行わなければならない。今回の訓練においては、溺者の確認

という初歩的な確認事項の未整備が明らかとなった。

さらに事故現場の動きを本部から見ると、溺者へのCPRが自信なさそうな様子であった。また溺者への声掛けも少なく思いやりが足りなかった。溺者に対しては何より心肺蘇生(CPR)が最優先になされるべきである。

また事故現場では、最初オロオロしてどうしたらよいかわからない指導員の様子も見受けられた。さらに、誰がCPRを行っている事故現場の総括をしているのか分からず、その結果、本部などいろいろなところから指示が飛ぶこととなり情報が混乱した。だれがどの動きに当たっても役割ができるようにするとともに、CPRの技術向上のために、呼吸停止や心停止を想定したCPRの練習はもちろん、CPRの手順を明示したレスキューファイルを上手に活用する必要がある。また、以上のように指摘され問題点を把握し改善していくことこそ、緊急時訓練の命題である。

児童管理の面からは、何かが起こったとき先生の「大丈夫だよ。」の声掛けで、子どもたちの安心する様子が見受けられた。また上陸時は、班の児童が全員上陸する最後まで見届けるとともに、児童はレスキューチューブを目印に整列して上陸することができた。緊急事態が起こったときの上陸方法では、付録のマニュアルに示した図3以外でも、逆向きで隊列上陸するなど臨機応変に対応し、素早く上陸することができた。

また、今年度採用したチェック項目からは、ホイッスルは多用せず緊急時以外笛は吹かないようにし、練習のスタートは水面をたたくように工夫する様子が随所で確認された。今後は、緊急時以外にホイッスルは用いないことを徹底する。

さらに指導者個々のCPRなどの実技能力が高められるように、ライフセーバーによるCPRの模範演技および技術指導を受け今年度の緊急時訓練を締めくくった。

b. 初日に「緊急時訓練」を行うことの有効性

臨海学舎初日の緊急時訓練により、指導者は一

定の緊張の中で水練を指導できたと考えられる。また、全日程において大きな事故が無かったことには様々な対策が関係していると推測されるが、初日の訓練もその一つであると考えられる。しかしながら、初日に緊急時訓練を行うことの有効性についての厳密な検証は本研究の方法では困難である。

また初日に緊急時訓練を行うことにより、実習期間中の児童自身の安全に対する意識向上につながるのではないかとという点でも、子どもたちの以下の感想からは伺えるものの、本研究において児童の意識が向上したかどうかについては客観的なデータを提示できてはいない。

初日の緊急時訓練時には、児童は本当に事故が発生したのではないかと思えるほどの緊迫した雰囲気の中で訓練を実施することができた。児童の感想文には、「初めはびっくりしてちょっと怖かった。訓練とは思えなかった。先生方が真剣にしていた。」などの記述が見られた。また、児童が指導者の指示を的確に受け入れ、緊急時訓練に積極的に参加していたことが窺われた。実際に今回の設定のように指導者が溺れることも想定される。そういったとき、児童はいざというときの大きな助力にもなる。訓練中には、指導者が児童に指示を出し、応援を頼むといった様子が認められた。

ここまで、小学校での臨海学校における緊急体制の確立並びに実際の緊急時訓練と、初日に行うことの重要性について言及してきた。これまで、他にも児童期の着衣泳の教育的意義や、救急・救助訓練により、技術的向上や自然や危険に対する認知度の変化を示す研究(高橋, 下川, 山本, 2003. 池畑, 高橋, 広瀬, 2000. 野村, 1991. 藤本, 1998)もなされている。今後も児童に対し、緊急時の動きを指導し訓練に参加させることも必要であるという認識に立って、臨海学舎の指導プログラムに緊急時訓練及び実践を継続していきたい。

V まとめ

救急体制の構築にむけて、Z小学校で臨海学校における指導マニュアル「臨海ハンドブック」を作成し、その上で安全な教育実践へと導く柱となるのが今回報告した「緊急時訓練」である。救急法だけでなく緊急時の動きについてフローチャートを作り事故発生時の対応についてマニュアル化し、「緊急時訓練」を実践した。

1. 「緊急時訓練」によって、実際の緊急時の情報伝達に不備のあることが明らかとなり、新たな問題点が把握された。次年度につながる実践的課題が明らかとなった。
2. 「指導者」が溺者である事故想定を行うことで、溺者を発見・救助に当たる際にCPRなどの蘇生技術の前に、誰がおぼれたのか「溺者の把握・確認」を行うことの重要性が再確認された。
3. レスキューファイルを活用することで、さらなる指導者のCPRの技術向上に繋げる。また上陸時の目印としたレスキューチューブなど、ライフセーバーの技術は、臨海学校指導において有用である。
4. 事前に児童へ「緊急時訓練」やそのときの動き方について説明をすることで、不安を取り除くことができ、児童は真剣に訓練に参加した。

「緊急時訓練」を臨海学校の初日に行うということで、一定の緊張感の中で水泳練習が実施できるなど、実習期間中の指導者と児童の安全に対する意識向上につながる可能性がある。

また今年度は、校内での緊急時訓練シミュレーションに基づき「緊急時訓練」を行い、緊急時の対応を全指導者で行った。臨海学舎の初日の訓練において情報伝達の難しさが明らかとなり、訓練は、校内のシミュレーションだけでは不十分であり、実地での緊急時訓練が必要であることが明らかとなった。情報伝達においても全指導者が関わるため、全指導者が訓練に参加する必要がある。

VI 今後の課題

特に安全性が追求される特別活動や野外教育活動において、緊急時訓練は、実際の緊急時対応において大変有用なプログラムである。

Z小学校における臨海学校では、緊急時訓練を含め大きな事故もなく、無事に初日の訓練及び全日程を終了した。しかしながらそのことだけでは、緊急時訓練を行うことにより、臨海学舎期間中の児童の安全に対する意識向上に繋がると論じるには不十分である。今後、児童の安全に対する意識がどのように変容したのかについても調査し、実証する必要がある。

付記

本稿は、日本教育実践学会第3回公開研究会での発表に修正・加筆したものである。また、本研究の緊急時訓練を含めたZ小学校の臨海学舎は、優れた取り組みとして平成19年度大阪府私立学校等教育振興補助金(先導的モデル支援事業)として採択された。

謝辞

本研究にあたり、実践校であるZ小学校の教職員・児童の皆様に感謝の気持ちを述べさせていただくとともに、小学校での実践が広く多くの学校での臨海学校の力強い実践につながっていくことを願っています。

【引用文献】

- 中見隆男：海浜における安全対策システムに関する一考察，日本体育学会大会号，42(A)，178，1991
 中見隆男：海浜における安全対策システムに関する一考察Ⅱ，日本体育学会大会号，43(A)，133，1992
 池上晶子・矢野博己・星島葉子・長尾光城・木村一彦：＜資料＞大学生を対象とした水泳実習の安全対策について，川崎医療福祉学会誌，第9号2巻，301-307，1999
 大田寿：学校の危機管理についての一研究，現代学校経営研究，兵庫教育大学学校経営研究会，第11号，

4-8, 1998

文部科学省：小学校学習指導要領，1998

高橋宗良・下川哲徳・山本外恵：小学校における着衣泳の実態調査，杏林大学研究報告教養部門，20，17-24，2003

池畑亜由美・高橋順一郎・広瀬伸良：本学〔順天堂大学〕海浜実習における着衣泳体験とその必要性，順天堂大学スポーツ健康科学研究，4，163-176，2000
野村照夫：着衣水泳と年齢の関係-児童の場合-，体力科学，第40号6巻，628，1991

藤本秀樹編：小学生のための着衣水泳の指導-子どもの命を守るサバイバルテクニック-，黎明書房，1998

長谷川勝俊：水泳と水上安全に関する研究-遊泳技術と水遊びに関する調査報告から-，日本野外教育学会第5回大会研究発表抄録集，日本野外教育学会，58-59，2002

木庭修一・山川岩之助：新訂水泳の段階的指導と安全管理，ぎょうせい，1986

文部省：学校体育実技指導資料 第4集 水泳指導の手引き(二訂版)，東洋館出版社，1993

日本体育大学水泳運動学研究室：改訂 臨海学校の企画と運営，遊戯社，2001

日本赤十字社編：水上安全法講習教本，日赤出版普及会，2000

小山健蔵・白石龍生・山根祥雄・安井義和：学校における安全管理と危機意識の状況について，大阪教育大学紀要，IV，54-1，99-109，2005

・各教員は，下見報告を元にもう一度自分の目で確認する。

(緊急体制の整備)

・浜とプールでの緊急時訓練を実施する。

・水練会議に反省会を開き，改善を行う。

2. 緊急時の連絡方法

もし，事故が発生したら，事故発見者は，その状況を的確に把握し，人命救助にあたる。

1人では，救助不可能と判断したときは，事故発見者は，自分の安全を計りつつ，連絡手段をとりながら応援が来るのを待つ。

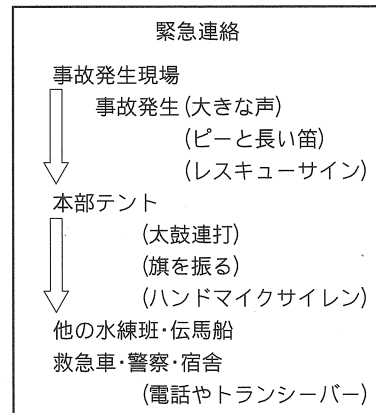


図1 緊急連絡の流れ

付録 臨海学舎ハンドブック

臨海学舎における救急法：救急救命とは，未然に事故を防止することが大前提である。

1. 事故防止

(身体の整備)

- ・本人の体調(顔色・唇の色・食欲・睡眠時間など)を確認する。
- ・朝の検温を毎日実施する。

(環境整備)

- ・練習浜の清掃(ビーチクリーンアップ)を行い，練習中も気づいた人が怪我をしそうなごみを拾う。
- ・子どもの目線に合わせて危険なところがないかを確認する。
- ・5水(水温・水流・水質・水底・水深)を確認する。調査ポイントは3箇所とする。

(テント本部での行動)

- ・救急車，宿舎，警察などの各機関への連絡を行い，確認する。
- ・本部に1名以上，全体を状況把握する人を常駐させ，詳しい状況を把握する。
- ・酸素マスク・担架・ポケットマスク・毛布・救急箱・トランシーバー・記録用紙を本部から現場へ運ぶ。

3. 緊急時行動の主な流れ

- 1：笛やトランシーバーやハンドサインなどを同時に使用し，事故発生を周囲に告げる(波打ち際，沖ともに同様)。伝馬船と本部は，相互に状況を確認する。第1・第2救助者は，自分の安全を確保しつつ救助活動にあたる。現場に集まった指導者は，的確な指示と行動と正し

い手当てを実施する。

- 2: 他の児童の安全を確保し、二次災害の防止に努める。常に声をかけ続け、絶対に動揺を与えない。浜へ隊列を組んだまま上陸。浜への上陸が不可能と判断した場合、踏水台(沖より50m程の浮島)へ一時上がらせる、伝馬船やレスキューボードへつかまらせる等の手段も考えておく。
- 3: 上陸後直ちに所定の場所に集合整列。パディの確認(顔と返事を確認して自分の手で座らせる)を行う。その後、本部へ連絡する。

4. 練習中の行動

(海での練習)

- ・ 浜に近い初級班および中級班は、直ちに児童を浜に連れて上がる。
- ・ 100m班などで、沖にいて児童がすぐに浜に上がれないときには、並列上陸か直列上陸かを判断し、児童を落ち着かせて浜に上げる(図2)。
- ・ 300m班以上で浜から遠い場所で泳いでいるときは、直列上陸を行う。

(プールでの練習)

- ・ 笛、ハンドサイン、声で事故発生を知らせ直ちにプールから退水させる。集合場所でパディを確認する。
- ・ 事故発生を本部に連絡し、状況を伝達する。宿舎にも状況を連絡し、応援を要請する。

ルを着用もしくは携帯する。

- ・ 各班の指導者は、練習コースを本部前のボードに書き込み、入水前にコース取りを他の班の指導者と打ち合わせしておく。
- ・ トランシーバーは、本部・プール・伝馬船・各練習班に常備し、常に電源をONにしておく。
- ・ 水練前に、浜の本部とプールには、酸素マスク・担架・ポケットマスク・毛布・救急箱・トランシーバーがあることを全員が必ず確認する。

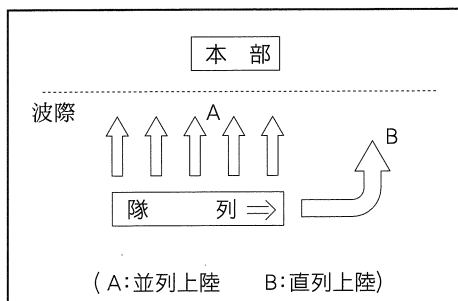


図2 直列上陸と並列上陸

5. 留意事項

- ・ 笛は全員携帯し、100m以上の指導者はゴーグ